

ご紹介いただきました、箕輪町の町長の白鳥でございます。今、紹介をしていただいた職員研修センターの山本さんが私の先輩なので、少しやりづらいのですが、与えられた仕事ですので、1時間ですが、講話ということで、最初の講義をさせていただきます。2日間にわたりまして研修があるようで、最初の入り口です。しかも首長の話ですので、少し適当なことという感じもしますが、せつかくの機会ですので、各市町村長がどのような気持ちでいるのか。それぞれ首長によって考え方も違うし、持っていこうとする方向も違うのですが、私なりに思っていることを少し述べさせていただいて、自分のところの首長がどのような考え方を持っていてそれぞれの運営をしているのか、確認していただければありがたいと思います。幾つか資料といいますか、レジュメを用意させていただきましたので、それに基づいて話させていただきます。

最初に「自己紹介」とありますけれども、書いてあるとおりです。私は、県の職員を三十五六年やりまして、定年間際に退職をして、選挙をさせていただいて地元へ戻ってきた者です。長野の生活が二十七八年、もう少しあったのかもしれませんが、それを終えて、地元は箕輪町ですが、箕輪に帰ろうかと思っていました。60を超えると、それから何年か、4～5年ですね。第2の就職ということがありますので、それを踏まえながら、いずれは箕輪に帰ろうと考えておりましたけれども、たまたま選挙ということになりましたので、今、2期目に入っております。

皆さんと同じ公務員を目指していたと言えはいいのですが、私は決してそうではなく、たまたま東京から帰る際に公務員になってしまったというだけで、それなりに考え方を持っていて仕事をさせていただいたつもりです。「忘れられないこと」と幾つか書きましたけれども、県の職員として、事務屋ですので、いろいろなところを回って仕事をしてまいりました。その中で、われわれ職員にとって大変大きな出来事は、やはりオリンピックの開催がありました。冬季オリンピックが長野で開催されて、それにいろいろな形で携わった職員が多いと思います。直接携わった者もいるし、社会資本整備を通じて携わった者もいるし、環境整備という人もいるでしょう。いろいろな形があるのですが、私は、国際課という課の中で、オリンピック・ボランティアの、特に通訳をする皆さんのボランティアの育成をしました。大体3,000人です。通訳そのものは、片言の通訳から同時通訳をする方までいるのですが、そのような方を3,000人育成して、オリンピックに備えました。

私の近くには50人の外国人がいまして、県民の方、また、全国から来るボランティアの方に指導して、オリンピックを迎えました。当時から、ボランティアの活躍がオリンピックを支えるという時期だったと思いますけれども、それが大成功に終わったオリンピックの一つだったと思います。今もってその皆さんと絆もあって、もう20年たつわけですが、オリンピックが、私たちとすれば大変大事なエポックだったと思っております。平成の30年の中で、長野県にとっての一番大きな出来事ではなかったかと思っております。

そのような県政の中で大変大きな出来事が、これから幾つか皆さんにお示しする中で出てきますけれども、オリンピックに向けていろいろな整備を進めました。やはり世界の

会ですので、県政が、オリンピックの終了と同時に少しふらふらしたといいますか、お金も使いましたし、いろいろな面で次の行き先が分からなくなった時代があったのだと思います。それと同時に、平成の頭というものは、経済的にはバブルがはじけて大変な時代だったのですが、長野県だけはほとんどそれを感じませんでした。私も仕事をしていて、バブルがはじけているという意味合いは、ほとんどなかったと思います。職員の皆さんも、そのように感じていなかったと思います。相当な予算を当時こなしていましたので、そのようなことがオリンピックと同時に一度にやってきたという感じがいたしますけれども、それが、2年後に田中県政を生んでいく素地になったと思います。

当時、「改革派知事」といわれる人がいろいろな所で出てきたり、私は決してそれがよかったとは思っておりませんが、県民の圧倒的な指示を得て、田中康夫知事が登場してまいります。2期6年を務めて、選挙で負けて去っていくわけですけれども、そのときの県政を、やはり相当長く引きずってしまったと思っています。これは県民世論が作るものですから、市町村も同じですけれども、そのようなところを非常に強く感じながら、私たちはその頃、課長補佐級から課長級へ上がっていく時代ですが、非常に強く感じながら仕事をしてまいりました。田中県政をどのように評価するかは、歴史がこれから評価すると思います。また、評価していると思いますけれども、私とすれば、首長によって県政が、市町村行政が動いてしまう。これは致し方ないことなのですが、それはいけないとは思っていますので、最初にそのようなことを申し上げました。

次に、村井仁さんのお話を幾つか載せてあります。この方は経産省出身で、当時の長野4区から衆議院議員になって、落選の時に田中さんと相まみえて、選挙に勝って出てきます。平成18年は当町、岡谷で災害があった時ですが、18年8月に当選をして知事になり、4年間お務めをして、1期で終わってお帰りになってしまいました。私は、村井さんがもう1期やれば、長野県ももう少し違った方向に動いたと思いますけれども、村井さんが私にとっては非常に感じる場所がありましたので、幾つか書かせていただきました。

前長野県知事①の最初に、「公務員であることに誇りを持ってない今の日本の風潮はおかしい」と書きました。これは、村井さんが言っている言葉です。このことは、民間の人がいるときにはあまり言わないことにしているのですが、当時は特にそうだったと思いますけれども、公務員の仕事はあまり大した仕事ではないという、そのような捉え方が非常に大きかった時代だと思っています。官から民へという流れや、行政改革、改革派知事が来ているいろいろなことを実証したというようなことが全国的な中で、そして、いろいろな不祥事も国・都道府県を問わずあったわけで、公務員は大したものではないという風潮が、非常に強かった時代だと思っています。

その中で村井さんは、このようなことを幾つかお話ししました。「民にできることは民に」ということは、確かにスローガンとしては、肥大化した行政をスリム化するためにはよいキャッチフレーズですが、公がやらなければならないことが常に存在することを決して忘れてはいけないということや、私たちの暮らしは、警察に限らず、大変な自己犠牲を払い

ながら公のために黙々と仕事をする、そのような公務に従事する人々の厳しい職務に対する責任感で支えられている。その責任感、仕事・職務に対する誇りがあるからできるのだということを、知事はよく言うておりました。

公の仕事は、皆さんのやっている仕事がそうだと思いますけれども、それほど脚光を浴びる仕事ではないと思います。公の仕事をしている中にも非常にマスコミにさらされながら仕事をしているポジションもありますが、ほとんどは、税の徴収や住民票の交付、対福祉など、公務員でなければできないけれども、地味な仕事がほとんどだと思います。そのような仕事があって初めて行政が成り立ち、住民生活が成り立つわけですが、そのことが忘れられている。公が、全てろくなことをしていないと言われた時代だったと思います。十年一日のように同じ仕事をしているのだけれども、その役割を評価していただけないということは、非常におかしな時代だったと思います。

さて、今はいかがでしょうか。公に対する考え方は、若干変わってきたように感じますけれども、一方で、今回の選挙を見てもそうですが、やや政治や地域に対する関心度が薄れてきているような気がします。ある意味で、満足感がある程度あって、改めて行政にいろいろと言う必要はないという風潮も否定できないと思いますが、もう少し行政に対して、また行政の担い手に対して、物を言ったり、評価をしていただいたりといったことが必要かと思っております。

その下に、これは知事が当選してきて、初の議会で提案説明をした時の一文です。「地域ニーズに立脚した行政サービスを提供するためには、住民に最も近い基礎的な自治体である市町村が主役になることが重要。県政を進める県職員には、知事の意向や組織内での調整のみに心を砕くのではなく、県民の方を向いて、まずその要望を聞いて、その実現のために奉仕をする」という書き方がございました。やはり県は、中間に位置している。住民サービスを行うのは市町村。特に長野県の場合は、「信濃の国」が代表ですが、それぞれの地域が分割されていて、それぞれの特色ある地域によって成り立っていて、そこに自治体があるということですので、市町村という自治体が持っている力が非常に大きいし、そこで十分な行政がされなければだめだということを、知事は常々言うていました。私もそのように思います。

2番目に書いたものは、どこでもありそうなことですが、特に県では、私も少しありすぎかと思っておりますけれども、県の場合は本庁と現地機関が非常に大きく分かれていますので、本庁の持っている仕事がどうしても知事もしくは幹部の皆さんの意向に沿いながら行政を進める中で、そこだけに目が行ってしまって、住民が見えないということが起きやすいと思います。大きな市から来ている皆さんは、そのようなことがあってはいけないということで書いてあるのですけれども、内部調整だけに仕事が行ってしまって、本来の行政のところに仕事の力点が置かれないことがよくあります。つまり、市長さんや部長さんの顔を見て仕事はするけれども、住民の顔は見ないということが起こりかねません。そのようなことを考えていただければということで、記載させていただきました。

次のページは、これは書いてあるとおりです。山積みする課題に対応していくために、知事や市町村長のところに権限が集中してしまっていて、本来仕事をしている課や係などの権限が、十分活用できないというやり方が考えられます。そのようなところを機能しなければいけない。後で「リーダー論」という所がありますが、そこでもまたお話しさせていただきたいと思います。

次に、菅谷松本市長のコメントがあります。菅谷さんという方は、信州大学の助教授から旧ロシアへ行かれて、原発の時ですね。長野県の衛生部長として1期やられて、松本市長に転じて、今、5期めの市長さんですが、ちょうど私は衛生部で横に机を並べていたものですから、いつも市長さんとはお話をさせていただきました。

市長さんはドクターですので、このようなことまで公の席でも言える立場だと思いますけれども、地域づくりについて松本市は、われわれが考えても民度が高いといえますか、社会性が強いといえますか、そのような町だと思います。そのような町であっても、「自分たちの町は自分でやってください」と言いますと、「高齢だからできない」「役員は嫌だ」などと言われる。そうではなくて、行政に対してはいろいろと要求する権利はあるけれども、住民にも義務と責任があるという言い方を、市長はしております。自治体が仕事をするということは、先ほど申し上げたとおりなのだけでも、住民の皆さんがどのような考え方でいるのかということも、大変重要な要素だと思います。なかなかここまでは、私もこのようなことは言っています。「要求や要望書だけ持ってくるな」と申し上げていますがけれども、このようなところは、やはり考えていかなければいけないことだと思います。

次に、「象徴としてショックな出来事」とあります。私は箕輪町から40年ほど離れていたわけで、土日には、自分の自宅がありますので、帰っておりましたけれども、そこで生活をしているという生活実感がほとんどなかったです。ですから、選挙をやって、3か月間、選挙前にはありましたけれども、地域を見てお話しさせていただくことで、初めて町の持っている可能性や潜在力などが理解できました。一方で、高齢の80代の女性だったと思いますが、町が好きで引っ越してきたのだけれども、年を取ってみたら非常に不便で、本当に後悔しているというお話をいただきました。このように自分の地域のことを思われてしまうと、悲しい。行政として、やらなければいけないことがもっとあったのかなと強く感じました。非常にこれは今でも心に残ってしまっていて、このことを常に考えながら仕事をしなければいけないと思っております。

その次に、リーダー論を二つ書かせてもらいました。われわれ首長は、リーダーシップを執って仕事をしろとよく言われますけれども、私は決してそのように思っておりません。カリスマといわれるようなリーダーが、役所だけではなく、民間にもいますけれども、何が起きているかという、確かに引っ張っていい仕事をしているリーダーもいますが、いわば取り巻きを作って、周囲の助言を遠ざけてしまっていて、組織を委縮させてしまうということも、よく起きている事例です。

もう一つは、現在のように非常に成熟した社会の中で、1人のリーダーが物事を決めて、

正しい方向に全てを持っていくことは、ほとんど不可能です。それができるとすれば、おごり以外の何物でもないとは思っていますので、できる限りそのような組織を作らないと考えています。また、素人といいますか、素人の発想も大事にしなければ、決められた方向にしか行かないということがあるので、リーダーは、そのあたりを考えてやらなければいけないと思っています。

次に、リーダーと組織についての考え方を書いてありますけれども、行政の組織を分類すると大体このようになるだろうというものが、この表です。正しいかどうかは分かりませんが、私は、ちょうどこの真ん中のものを目指しています。「庁内分権型」ということで、うちの町でいけば、課長が一番頭ですので、課長、係長、係員と。大きく言えばそのようなシステムなのです。係長の所に、権限ということではなくて、非常に強いものを与えて、そこから物事が出てくるという形を作りたいと思っています。

左に企画や財政主導型とあるのですが、財政が良くなって給与カットをしなければいけない、行政改革、人を減らさなければいけないというときは、庁内分権型や現場型などをやっていたはまともりませんので、確実にトップダウンで決めていってしまいますけれども、そうでない状況であれば、下から上げていくという方策が必要だと思います。ただ、下から上げていくにも限度がありまして、完全なボトムアップにするとものが動かなくなってしまいますので、スピード感が失われてしまいますので、大きなところで言えば課長さん、小さな組織で言えば係長レベルのところ为抓手りして、そこが起点になって仕事ができる組織がいいと思って、やっております。

もう一つは、ここに「現場主義」と書かせてもらったのだけれども、トップに上がってくる情報は、あまり悪い情報は上がってきません。よほど困らないと上がってきません。それと同時に、何本か政策決定のために考えなければいけないことがある、何案もあるということも、あまり上がってきません。どちらかという、悪い部分というか、言いにくい部分といいますか、そのようなものがそぎ落とされて上がってきます。ですので、どうしても現場に情報源を持っていないと、本当の判断ができないというところが出てまいります。これは皆さんもそうですが、いろいろなところに情報源を持っていることは、やはり大事なことです。それは現場にしかないということもあるので、役所だけではない組織の中で情報を取れるような力を持っていないければ、いい仕事ができないと考えられます。その点を考えてくれればありがたいと思っております。

次に、「地域に飛び出しましょう」ということや、「人材の中心に公務員」と書かせてもらいました。公務員は、最初に言ったように、自己犠牲を払いながら公のために仕事をしている。仕事がそのような仕事なので、当たり前なのですが、その中で当然備わってしまうものが、地域について常に元気にしたい、幸せにしたいという思いだと思います。それが、実は県職員にはあまりないのです。県職員はサラリーマンなのですね。県職員は、市町村の職員とはやはり違うと思います。常に現場が見えている皆さんと、県のように間に市町村があって、サラリーマン的な仕事ができることとはやはり違います。地域を幸せに

したいという気持ちは同じだと思いますけれども、どうもそこは、私の今の状況と県の職員の時代を考えますと、大きく違うのではないかと思います。

皆さんにお願いしたいことは、サラリーマンになってほしくないということです。一住民として、公務や家庭だけではなくて、やらなければいけないものが皆さんにはあるのだということ。何をさせていただくかは皆さんが考えていただければいいのですが、そのようなことだけは、お伝えをしたいと思います。どちらかというと、そのようなことをしている人は、本当の仕事をおろそかにしていると思われる節が、ないわけではない。サラリーマンの県職員では、まさにそのように思っています。「もっと本当の仕事をやればいいのにな。あんなNPOの仕事ばかりやっていて」などと思ってしまうがちです。多分それは、私とその当時、そのように思ってしまったのかもしれませんが、今は、そうではないという感じが非常に強くしております。公務員の持っている力を、いろいろなところで発揮していただきたいと思います。

次の三つめの丸は、井上さんという、プログか何かで見てもらえれば分かりますけれども、総務省の30代のキャリアです。鹿児島県の長島町へ赴任して、そのあと愛媛県の市町村課長を2年終わって、東京に帰りました。今、地方創生の事務局に入りましたけれども、その方の言っていることです。ルーチンワークだけやっていたら定年まで勤められる。これを「お役所仕事」と言うのだけれども、市町村職員にとって大事なことは、地域の人に信頼されるかどうか。「覚悟と継続が大事だ」と。定年まで勤められればいいと思っているような人と、民間人は組みたくないのだと井上さんは言うております。そのような人材は公務員の中にはたくさんいますので、外へ出て仕事をしていただければありがたいと思います。

次に、地方創生。今、地域で行われていることを書かせていただきました。地方創生という言葉が出たのは平成26年ですが、私の選挙の最中に法律ができたのですけれども、それまでそのような発想はありませんでした。もっとも、地方の時代と言われたり、地方の再生と言われたり、活性化と言われたり、いろいろな言われ方をして、地方を何とかしなければいけないと言ってきたのですけれども、初めて地方創生という言葉ができて、法律ができて、予算もできて、大臣すらできて、事業が始まりました。これは、全国の人口減少を課題として国が初めて、初めてといいますか、認めて、動きだしたものであります。

人口減少に歯止めがかかっているかどうか、皆さんの市町村はいかがでしょうか。多分、大変だと思います。私も、諏訪のことはよく承知していません。大変厳しいということは2市町については思っておりますけれども、平成30年1月と平成31年1月を比べますと、諏訪市で333人の減。岡谷市で549人の減、下諏訪町で256人の減、富士見町で196人の減となっています。これは、亡くなる方と生まれる方を比べれば、亡くなるの方が多いからということと同時に、外へ出ていく方もかなりいらっしゃるということだと思いますが、そのような状況です。

私たちの町は、おかげさまで、それほどの減少はありません。ここのところ3年間ほぼ

横ばいですが、お隣には南箕輪村という長野県で唯一の優等生がおりますので、人口増をまだ続けております。かなり厳しくなっていると私は認識してはいますが、そうは言っても、唯一自然増が多い。生まれる子供の方が多いという状況が、南箕輪だけが持っています。昨年は多分厳しかったと思います。まだ統計数字を見ておりませんが、このような状況が、長野県の中で起きています。これを何とかしなければいけないということで、それぞれの部局だけではなく、いろいろなところで事業を重ねておりますが、なかなか人口減少に歯止めはかかりません。非常に難しいことだと思います。

今、何が起きているか。東京一極集中を何とかなくして、地方へ人口を呼び戻そう、移住をさせよう、定住してもらおうということをしているわけですが、それほど簡単なものではありません。東京一極集中は、この5年間も全く変わらず進んでしまっています。何が今、起きているかという、人口は全国的には減っているわけで、減っている中で、みんな一生懸命争っているということです。

私たちの町で言いますと、人口が移動する3分の1は、郡の中で起きます。もう3分の1は、県の中、諏訪や松本と対箕輪で起きます。もう3分の1は、東京です。東京といえますか、県外です。ほとんど東京圏ですけれども、つまり、3分の2は県の中の決まったパイの争いをしていて、それで勝ったり、負けたりしています。これがいいことかどうかは分かりません。ほとんどいいことではないという人が、学者は多いですね。「何をやってるんだ」と。地方創生といいながら、人口の奪い合いをしているのだと言われます。勝ち組と負け組ができてきているということだと思います。

そして、また何が起きているかという、私たちの町は保育料を下げます、出生には祝い金を10万円出します、住宅を造るには50万円出しますというようなことをやっています。私たちの町もやっていますけれども、結局は、お金のある所が勝ち、ない所が負けとなってしまう可能性があります。ですから、今、起きていることを、若い皆さんにどのように考えてもらうか。子供のために出生祝い金を出せば、子供を本当に産むのかどうか。産むわけがないですね。このような町村もあるのです。いい、悪いとは言っていません。1人めは2万円だけれども、4人めは30万円という町村もあります。私たちのところも、議会に「作れ、作れ」と言われて、何人生まれても1人2万円というものを作りました。1人めと4人め、5人めを金額で差をつけることがどうしてもできなくて、そのようにしましたけれども、そのようなことが今、起きてしまっていて、これはいかがかんと思っています。皆さんの町村の施策を見ていただいて、どのように考えるかだと思います。

もう一つは、結婚ですね。晩婚化になっていることが少子化の大きな要因の一つなのですが、それについて、どのように考えていけばいいのか。一般論から申し上げますと、「結婚しよう」と行政が言うことが、本当にいいことかどうか。26年の当時に、「結婚しよう運動」をしようという知事さんたちが集まって、何だったか、作ったのですね。そのときに『信毎』が、社説で「何をやろうとしているんだ」と。行政が結婚するという方向に導いてしまうことは、おかしいではないかと書きました。個人の選択や価値観が、まさに結

婚には大事なところなのに、それに行政が入ってくるのはいかなものかという論陣を張りました。結婚しようということは行政が言うことではなくて、個人が言うこと、本人が言うことだというのが、『信毎』の言い方です。

私はそこまでは思いませんが、ある意味で当たっている部分もあるのだけれども、別にこの女性に「結婚してくれ」と言っているわけではないので。そのような社会的な必要性を認知してもらおうとしているだけなのですが、地方創生の難しさは、「生まれる」「育てる」などの人間の生き方を問う問題と書いたのだけれども、そのような問題なのです。そこが難しさだと思います。自分が作ってきたライフスタイルを変化させなければ今の状況は変わらないわけで、非常に難しいことだと思います。本来は政治や行政で解決できる問題ではなくて、生物としての人間が何を考えるかという問題なので、難しい問題だと思います。いながら地方創世に取り組んでいます。

課題に幾つか書いてあるけれども、「一次産業の活性化なくしては元気にならない」。これはこのとおりで、この地域にとって言えば、農家がどれくらい元気になるかが肝です。しかし、農地は減少する、担い手は減少する、他の産業へ入っていくということが時代の趨勢ですので、それをどれだけ止めて、農地を農地としていかに維持していくかに力を入れていかなければいけないと思っております。

それから、「教育の在り方」と書きましたけれども、ここもなかなか難しいところで、中学生や、箕輪町には箕輪進修高校しかないのですが、高校生に、「地域のことを考えてください」と言います。「箕輪町はどのようなところだと思うか」と中学生に聞くと、自然がよくて、空気がおいしくて、景観がいいと言うのです。大体この三つの何かが出てきます。このようなものは日本中どこでも同じなので、日本中で同じようなことを勉強しているのではだめだと思います。箕輪町や富士見町のことを自分の町として言っていただくような子供が育たないと、「帰ってこい」と言っても、帰るような子供たちは育ちません。箕輪では、外へ出た方の3割ほどが、帰るか、帰らないか。特に女性がだめといますか、帰ってきません。女性が少ないものですから、どうしても少子化になってしまいます。そのような悪循環を変えていくためには、本来は教育がどうしても必要だと思っております。ただ、これは簡単にすぐ答えが出る問題でもないし、5年や10年で形ができるものでもないですけれども、ここに何かキーポイントを入れていかないと難しいと思っております。

次に、地域を動かしている人々、集落のことが書いてあります。これは、集落といますか、自治会といますか、区といますか、常会といますか、そのようなところの力が非常に弱くなってきているということが、どこの地域もいえると思います。これを何とかしたいとやってやるのですが、なかなかうまくいきません。ほとんど困っているのですが、例えば「福祉」は特にそうですけれども、今の社会保障制度、年金や医療などの制度の中だけで解決できる問題でもなくなってきていて、地域の力がなくてそこで高齢の皆さんが暮らすことができない時代になっていて、地域の活力がどうしても必要です。しかし、そのようなことを言うと、高齢だし、過疎だし、後継者もないし、何でもいいと、何で



もいいとは言いませんが、困れば市役所や役場に相談すればいいので、「われわれに仕事や何かさせるようなことは持ってくるな」ということが、地域の実態だと思います。

それをどのように意識を変えていくのか、非常に難しいと思いますが、それをしなければいけないと思っています。どれだけ嫌がられても、私は言うことにしています。本当に嫌がられています。それをやらないと、私たちの町のようにまだ高齢化率もそれほど高くなく、若者がいる所でも、非常に厳しく周辺部はなっておりますけれども、地域の皆さんにもうひと踏ん張りしてもらわないと、地域が崩れてしまうということがあるし、住民の皆さんの利便性がなくなってしまうということがあります。

その中で非常に難しいことは、住民が一体となって活動する、話し合うといったことが、なかなかできない。サラリーマンがほとんどなので、話し合うことすらなかなか難しいということが現状だと思っております。それを、どのような仕掛けを作ってやればいいのか。「集落の再熱に向けて」というのは、県でも一時期事業を組んで、地域に補助金を出して、話し合いをして、今まで眠ってしまったようなことを掘り起こそうという事業もしました。うまくいったところもあるし、なかなかうまくいかなかったところもあるのですが、そのようなものを、各市町村のそれぞれの地域の中で作りだしていく必要があると思っております。

次に、「成功する地域」と書いてあります。地方で足りないものは、お金ではなくて人材。これは先ほどの井上さんあたりが言う言葉なのですが、井上さんにとっては外から行って地域を変えようという発想ですので、地域のことを地域の中だけで解決する時代ではなくなっている。そのような意味の人材を、外から出さなければいけないという言い方です。私もそのような面もあるけれども、若者や女性が、いかに地域の中で頑張ってもらえるかが肝だと思っております。特に地方の上の世代が、若者を積極的に受け入れない部分や、若者の感性を否定してしまうというようなことが、よく言われるところです。

代表的なことは、皆さんも知っていらっしゃるか、北九州市の成人式です。ヤンキーの格好をした成人式のテレビを見たことがあると思うのですが、マスコミでは変な格好をしているヤンキーたちということで報道されているのですが、地域の若者たちが働いて、お金をためて、何十万もかけてあの格好をしているのですね。決しておかしい連中ではないのだそうです。全部見たわけではないので、そのようにいわれています。自分たちにとって理解できないから「あれはだめだ」と言ってしまうと、彼らの趣味や主張などを消してしまって、若者も、上の人に気に入られる人だけが残ってしまう。若者といいながら老人クラブができてしまう。若者クラブではなくなってしまう、硬直的な人になってしまうということが、よくいわれております。そのようなところを、われわれも気をつけていかなければいけないと思っております。

次に、そのこととほぼ同義語ですが、「地域を動かしている人々」と書きました。うちの町もそうなのですが、職員は別にして、議会や商工会、JA、区長会など、みんな60歳や70歳の方が地域を動かしています。若者が動かしている、女性が動かしているという感じ

は、正直に言って、いたしません。これでいいのかと思います。これを何とか変えていかなければならないと常に思っているのですが、特に難しいことは、若者の皆さんを行政がどのように捉えられるか。ほとんど難しいです。女性の方はまだ何とか、結果的にうまくいきませんが、やりうることがあるのですけれども、若者という人たちが地域の中でどのような活躍をしてくれるかを探すことは、非常に難しいです。

一つは、例えば消防団のような活動が地域の中であって、消防団はうちの町では35で終わりですけれども、そこを終わると、途端に家庭人になってしまうのですね。全く家庭人になってしまって、せっかくあれだけ地域の安全や安心を守ろうとしてやってきたのに、なぜもう一步出てくれないのかと言っても、なかなかうまくいきません。今の若い人たちは、私もそうだったのかもしれませんが、仕事から帰ると家庭が大事で、地域のことはおじいちゃん、おばあちゃんに任せればいい。その地域のことは、地域の60歳や70歳の人に任せればいい。そのような感じがあって、それを引きずり出してくることが、非常に難しいです。本当に思案しています。

実は去年、若者・女性活躍推進係というものを作って、何とか「若者と女性の活躍を」ということをもってやっておりますけれども、女性のところは何とか手がついてきましたが、若者は手がつきません。いい案があれば教えてもらいたいくらいですけれども、これは若者の問題なのか、上の世代の問題なのか、よく分からないところも含めて。それから、私たちの町に学生はほとんどいないので、学生のいる所は、学生をいかに地域の中で呼び戻すかということも、地域の活力を作る上では非常に重要だと思っています。

次に、「女性」のことを書きました。女性は、いろいろな面で活躍をお願いしたいと思えます。人手不足があって、労働力不足があって、女性がそれを変えてもらえるのだという意味では、私は思っていません。政府は、その部分が非常に強く、色濃く出てしまっていますけれども、何より地域の中で女性に頑張ってもらいたいということが1点です。元気な女子力や、日常を知っている強みと書きましたけれども、スポーツ一つを取っても、女性の活躍は非常に目につくと思います。ところが、男性側の固定観念で、なかなかそこまで来なかったのだと思います。

例えば、私たちの時代に、陸上競技で女子の5,000m、10,000m、マラソンなどは、全くありませんでした。女子のスキージャンプが始まったのは2大会前ですので、男性に遅れること90年あって、初めてジャンプという競技が女子に入りました。サッカーしかり、ラグビーしかり、みんなそうですが、90年前の女性と今の女性の体力が違ったりするわけではないので、90年前の女性もジャンプはできたと思うのです、やらなかっただけで。ところが、女性はそのようなことはできないという固定観念があって、やらなかったのだと思わざるをえません、そのようなものを取り払っていかないとだめだと思います。

それから、日常を知っているという点では、消費をコントロールしているのは女性です。わが家もそうですが、買い物は私も行きにくくなってしまったので、ほとんど行かないということがありますが、お財布を握って買い物をしているのは、ほとんど女性。旅行の行

き先を決めるのは女性、子供に「何をしろ」と言うのも女性。つまり、財布は女性が握っていると思ってかまわないと思います。そのように考えると、女性の意見を取り入れなければ、いい仕事につながらないと思わざるをえません。特に、書いたような地域づくりや防災、健康、Uターン施策などは、女性が最も活躍できるポジションです。このようなところに女性の皆さんの活躍を大いに期待したいと思っています。

長野県は、健康長寿でトップ1か2か分かりませんが、走っていますけれども、これは別に男がしたわけではありません。女性の皆さんの活躍があつて初めて健康長寿ができているわけで、いろいろなところで女性も出てきてほしいと思います。これもなかなか難しいところがあつて、晩婚化していることもあつて、子育てが終わるのが遅い。そのうちに介護が始まるという図式になっていて、Mカーブそのものがだいぶ崩れてきたとはいいいながら、女性が本式に地域に出てくることはまだまだ難しいということは、いろいろなことをやりながら分かっておりますけれども、そうはいいいながらお願いをしたい。皆さんの力も使ってほしいと思います。

最後に「嘆き節」と書きましたけれども、これは本当に嘆き節です。県というところは、私も長年勤めさせていただいてよく思いますけれども、圧倒的な政策力といいますか、専門性といいますか、そのようなものを備えています。人が多いこともありますけれども、そのように私にも見えます。県の皆さんにお金と統計と要望書を渡しますと、政策を作ってしまう。うまくいくかどうかは分かりませんが、一定の政策を作ることができます。市町村は、そのようにはいきません。ですから、ぜひ若い皆さんに政策を作る力を作してほしいと思います。政策形成能力を高めてほしいと思います。箕輪町ができないだけではなくて、他の市町村も、みんなそのように悩んでいる。自分自身も含めて悩んでいると思います。

それから、もう一つ嫌なことがあります。これは嘆き節なのですが、県で厳しい、何かを拘束するような条例を仮に作ったとしても、それを作ったのは白鳥だとは誰も思いません。それは分かりません。国の役人が誰かということも、分かりません。ところが、特に私たちクラスの市町村では、「あいつが作った。こんなもの作りやがって、反対」と。あの人は嫌いだから、好きだからということも含めて、そのように見えてしまいます。そもそもその仕事にタッチしている人は1人か2人しかいませんので、その政策を作った人が誰だということが、よく分かってしまう。そこが本当につらいところです。

一生懸命やっているし、きちんと仕事をしていれば分かってくれるといっても、それは通じません。いかに情報を出して、説明責任を果たすか。これに限ると思います。市町村は特にそうだと思います。情報の出し方も、上の者は、完全に決まった情報や首長が最終的に了解した情報でないと出したがらないのですが、生煮えの情報でも、未成熟な情報でもいいから、どのような言い方をするかはかなり問題があるのですけれども、出していくということが、われわれにとって救いになります。そのようなことをやっていただければ、思っていただければと思います。

最後に、これは「一般論」として書きました。「生きづらい時代」。本当にそうだと思います。現役の皆さんの負担感は非常に重くなっているし、都市と地方の格差が非常に大きくなっているし、一体何をよりどころにして生きていけばいいのかと思うところが、ないわけではありません。私は、立場もあってこのようなことしか言えませんが、自分の生まれ育った、今、住んでいる地域。そこをよりどころにしていきたいと思います。何かがあるか分かりませんが、地域の資源に魅力を作っていきたいと思っています。

最後に、箕輪町のPRといたしますか、紹介をさせていただきます。特に諏訪の皆さんは、上伊那や飯田の方に行くことはなかなかないと思いますが、箕輪町にも、それほど遠くない所で、諏訪湖や蓼科、霧ヶ峰などの知名度のあるものはないですけれども、ここに記載しましたような花桃街道や赤そばの里、もみじ湖など、負けず劣らず、町を代表する風景になっているものがあります。何かの機会に立ち寄っていただいて、できればお金を落とさせていただければいいなと思います。

幾つか申し上げました。講話にしては変な感じでしたけれども、常々思っていることを皆さんにお伝えをしておりました。一番のことは、元気でない町を元気にするだけでは、今は勝てないです。元気な町だからといって何とか勝負できる町ではなくて、選ばれる町にならなければ勝てないという感じがしています。活力をつけることはできるのですが、「その町が人から選ばれるかどうか」ということです。今、いろいろなところで、知名度を上げたり、ブランド力を上げたりということをやっていますけれども、いい町、住みたい町というようなレベルでは、今の市町村間の競争になっているところには勝てないと思います。何か特徴を見いだして、選ばれる町になっていきたいものだと思っています。

そのようなことを申し上げて、講話というには少し拙いのですが、私のお話にさせていただきます。新人の皆さんは大変だと思いますが、時間がたてば解決しますので、頑張ってやってください。前列に箕輪町の職員がいて、非常にやりづらかったのですが、皆さんが入るかどうかわかりませんが、どうもありがとうございました。皆さん、頑張ってください。

(反訳範囲終了)